



審査講評

第六十二回展審査部長

加藤 東陽

第六十二回全日本書初め大展覧会において、栄えある賞に輝いた皆さんに、心からお祝いを申し上げます。

今年は、全国各地より、席書の部と公募の部を合わせて一万二千六百四十六点の力作が寄せられました。書に親しみ、筆を持つ喜びを味わいながら、すばらしい作品を出品されました皆さんに心から敬意を表します。

審査会は、日本武道館において行い、「席書の部」を一月六日に、「公募の部」を同十八日に、公平かつ厳正に、特に上位賞の選出においては投票によって行われました。

その結果、内閣総理大臣賞に、席書の部・西川董さん、日本武道館大賞に、公募の部・荻野愛菜さん、文部科学大臣賞に、席書の部Ⅱ堀澤橙さん、松本うたさん、公募の部Ⅱ金子葵さん、大澤葵翠さんをはじめ、各賞が決定いたしました。受賞された皆さん、誠におめでとうございます。

席書・公募共に、年々作品のレベルが向上しており、審査にも一段と力が入りました。特に、上位の賞の決定にあたっては、実力が伯仲して一回目の投票では決まらず、決選投票になったことも申し添えておきます。

今回展の特色として、次の三点を挙げます。まず一つは、今年も小・中学生の部門は、全学年にわたって全国各地から多数の出品があり、嬉しく思いました。そして、毛筆表現の豊かさや丁寧さなど、力作が多い中で、特に墨色の濃淡や紙質において効果的な作品が多岐にわたっていたことが印象的でした。このことから全国的に筆のつながりを持つ書初め展であることを改めて実感いたしました。

二つめは、高等学校と大学の部共に、臨書作品が多いことは昨年と変わりませんが、今年は創作作品が増えたということです。篆書・隸書や行書・草書などを中心とした視覚性の強い熱意ある作品が多くありました。古典を十分学習して練度のある個性が光る作品は大変魅力的です。ぜひ仮名や漢字仮名交じり作品にも挑戦されることを期待いたします。

三つめは、席書の部において、今年も幼児から高齢者（八十四歳）の参加があり、生涯学習の視点からも活気に満ちていたこと、そして、公募の一般の部においても、韻致の高い作品が数多くあったことです。

さて、今年の十二月頃には、日本の書道が「ユネスコの無形文化遺産に登録」されるのではないかと報じられ、注目されています。これからは本展覧会が、書道文化の歴史と伝統を継承していくと共に、時代に寄り添って一層の発展も強く求められてきます。皆様と共に歩んでまいりたいと思います。また、本展覧会の参加者の中から、令和八年度の日中青年学生交流事業参加候補者として、計五名の高校・大学生が選出されたことをこの場を借りてご報告申し上げます。

来年も、全国から、多数の快作にお会いできることを期待し、審査講評といたします。